

実践型教育の有効性を高める教育プログラムのあり方

— NYFAオーストラリア校での映画制作教育を事例として —

後藤 昌人

小室 達章

中田 平

Masato GOTO

Tatsuaki KOMURO

Hitoshi NAKATA

Education Program to Enhance the Effectiveness of Practical Education

— A Case Study of Filmmaking Education in NYFA Australia —

1. はじめに

近年、多くの学問領域において実践型教育のあり方が議論されている。特に大学教育においては、学生が卒業後に就職する業界で求められるスキルや能力を習得するために、数多くの実践型教育がおこなわれており、教育事例として、その報告がなされている¹。その多くは、実際にその業界で事業展開している企業と連携し、その事業活動の中に教育の現場を設定している。つまり、学生が実際にその業界の中で、何らかの実践的活動に携わることで、その業界で必要となるスキルや能力を身につけていくことが期待されるのである。

我々はこれまで、所属する国際情報学部の海外研修科目の必修化や授業・ゼミでのデジタルコンテンツ制作の教育を背景とし、ロサンゼルスでのショートフィルム制作研修の実施をはじめ、映画制作への実践を通じて、本学における映像コンテンツ制作教育のあり方をアメリカの映画教育を参考に探ってきた。特に海外研修先でもあるNew York Film Academy（以下NYFA）の教育プログラムについて、ロサンゼルスとニューヨークで調査を重ね、映画産業とのつながりも含めた映画教育の現状について情報を集め、アメリカ独自の映画産業と一体化したハイレベルな教育環境が出来上がっていることなどを確認してきた。その中で、NYFAが大学と連携している事例があることを知り、オーストラリアでの調査を実施することとした。目的は、大学と映画教育の視点で見た

¹ 大学における各業界の実践型教育について、多くの事例が紹介されている。例えば、小山（2013）は、ブライダル業界の実践型教育について、熊谷他（2010）は、建築設計業界の実践型教育について事例を紹介している。

時の実践型教育に向けた意味や価値を見つけ出し、そのために何をおこなう必要があるかということを出発点とする。具体的にはNYFAのオーストラリア校とクイーンズランド工科大学（以下QUT）が連携して単位互換を実現している点や、それを支えるNYFAオーストラリア校の教育方針や企業と連携した教育環境もあわせて調査をおこなった。実施期間は、2013年11月15日～22日である。

以下、本研究における問題意識を整理し、これまで我々が調査してきたNYFAロサンゼルス校とニューヨーク校での映画制作の実践型教育の特徴を概観し、実践型教育の有効性を高める教育プログラムを考察する糸口を見いだす。次に、NYFAオーストラリア校での映画制作の実践型教育について、ヒアリング調査をもとに整理し、NYFAオーストラリア校で実践型教育の有効性を高める教育プログラムのあり方として、徹底した基礎教育と実践を見据えた体系的な教育への判断がおこなわれていることを提示する。そして、最後に、本研究の含意と今後の課題を提示して、本稿のまとめとする。

2. 問題意識

本論文では、大学教育の中でも、特に、映像制作という分野の実践型教育を対象として、そのあり方について議論する。大学教育における映像制作については、その実践型教育の中で、さまざまな能力やスキルの習得が実現されることが報告されているが、実際に、どのように映像制作を実践することが、これらの能力やスキルの習得につながるのかについて、明確な教育モデルが提示されてこなかった²。しかしながら、我々は、これまで、映像制作における実践型教育の一つのモデルとして、NYFAの映画制作における教育プログラムを取り上げ、その有効性を考察してきた（後藤他、2013）。特に、NYFAのロサンゼルス校とニューヨーク校においてヒアリング調査をおこない、映画業界と一体化したハイレベルな教育環境を実現することで、多くの人材を映画業界に輩出していることを確認してきた。これは、まさに教育機関が、業界と連携することで、教育の現場を業界そのものに設定し、学生がその業界で必要となるスキルや能力を習得するという実践型教育に他ならない。

このような映画制作におけるNYFAの実践型教育の有効性は、もちろん、ハリウッドという映画業界や、ブロードウェイというショービジネス業界との結びつきによって達成できているといってもよい。実際に、NYFAロサンゼルス校は、ユニバーサル・スタジオ・ハリウッドに隣接しているし、NYFAニューヨーク校は、ブロードウェイ

² 映像制作の実践型教育によって習得される能力やスキルについては、松野他（2013）を参照。また、映像制作における実践型教育の教育モデルについては、間島（2013）を参照。

に近いということもあり、それぞれ業界との物理的距離が近い。その物理的距離の近さが、業界との結びつきの強さを実現させ、業界そのものを教育現場とする実践型教育を可能にしていると言ってよい。

しかしながら、この業界との物理的距離だけが、業界そのものを教育現場とする実践型教育の有効性を左右するわけではない。実践型教育の試行錯誤の中で獲得された経験によって実現した教育プログラムの内容そのものも、実践型教育の有効性を左右する。例えば、NYFAでは、ロサンゼルス校やニューヨーク校以外に、オーストラリア・クイーンズランド州において、NYFAオーストラリア校のキャンパスを構えており、ロサンゼルス校やニューヨーク校と同様の教育プログラムによって、映画制作教育を実践し、数多くの人材を映画業界に輩出している。そこで、本研究では、オーストラリアという、ロサンゼルスやニューヨークなどの映画やショービジネスの本場ではない地域で、映画制作の実践型教育を展開するNYFAオーストラリア校を調査し、物理的距離以外での実践型教育の有効性を高める教育プログラムのあり方を探求する。

3. NYFA・LA校とNY校における実践型教育の考察

ここで、オーストラリアでの調査に向けておこなった、NYFAロサンゼルス校及びニューヨーク校での調査、実際にこれまでロサンゼルス校にて3回おこなった8日間の学生ワークショップでの経験をもとに、その実践型教育を整理し、学習プログラム特徴を考察しておく。

まず、NYFAロサンゼルス校における最も魅力的な特徴は、間違いなくユニバーサル・スタジオ・ハリウッドのセットを使った撮影環境であろう。ユニバーサル・スタジオ・ハリウッドは1964年に開業した世界でも有数の映画撮影のスタジオであり、テーマパークでもある。NYFAは授業内での撮影に、バックロットと呼ばれる広大なスタジオの一部のセットを使用する契約をユニバーサルスタジオと交わしている。そのため、商業映画の撮影にも使われるセットを使用して、学生が撮影をすることができる。それに加えて、ハリウッドに限りなく近い環境は、必然と一線で活躍する映画監督や役者、映画関係者をゲストスピーカーとして講師に招き、学生との接点を作り出す。

次にニューヨーク校の特徴は、街全体が撮影場所と言っても過言ではないくらい世界でも有数の映画の撮影地であるニューヨーク市が、撮影場所の対象になる点である。しかも、学生が街で撮影する際の撮影に対する制度やマニュアルをはじめとするバックアップ体制が非常に充実している。主要な公園や公共施設、道路や建物など、場所に合った撮影に関する注意事項、手続きの手順、費用や関係者や近隣住民に対する周知方法

まで、誰でもオンライン上で確認から申請までが可能になっている。場合によっては、学生の撮影であっても警察が出動し、道の封鎖や交通整理を行うなど、映画教育の機会均等の一端を公的機関が担っている。さらに、10分も移動すれば、ブロードウェイを始めとする演劇界の頂点に触れることができる環境が、ニューヨークで学ぶことの最大の特徴であり、それを裏付けするように学生の学習環境には必ず世界トップレベルの関係者がごく当たり前に存在する。

つまり、アメリカで映画について勉強するという事実が、学習者が満足感を得るための様々な動機付けの基礎になっている。特にハリウッドやニューヨークという、映画において絶対的なブランドが生み出す効果は、学生にとっては計り知れなく、学習におけるやる気や満足感を容易に高めてくれる。これこそがNYFAに世界中から学生が集まってくる要因だろう。

さらにNYFAでは、チームで撮影をおこなうために様々な教育が準備されている。ここでポイントになるのが、学生に与えられた意図的に作られた訳ではない撮影チームという一つのコミュニティの中で、それぞれの意見がチーム内でまとまったり公的に認められたりするプロセスが個人の役割を明確化させ、お互いに高め合いながら実践できる点である。さらに短期間で作品を完成させなければならない現実が、そのプロセスをさらに加速させ、学生の集中力を引き出す。そして、編集を通じて作品が出来上がったときの充実感や満足感が、コンテンツ制作の魅力を再認識し、楽しさの質の強化や固定化につながり、知識を得たい、技術を習得したいという、次に何かを学習したいという意欲や意識が生まれやすくなる³と考える。つまり経験が生み出す学習の効果は計り知れず、特に成人の能力開発の大部分は経験によって説明することができ、熟達者を育てる上で最も重要な方法は「良質な経験」を積み重ねることにあるとされている。そのため、コンテンツを消費する立場であることが多い学生が、ゼロから制作に取り組む経験は、非常に価値の高いものである。

4. NYFAオーストラリア校での調査

ここでは、本研究の目的である、NYFオーストラリア校での調査について触れる。NYFAオーストラリア校は、ゴールドコースト中心部から車で20分の所に位置し、オーストラリアの大手映画製作会社であるVillage Roadshowのスタジオ敷地内に校舎を構える（写真1）。Village Roadshowのスタジオ内には、本格的な撮影時のセットなどを組む時に使用する大きなサウンドステージと呼ばれる施設が全部で8つあり、水中

³ 良質な経験が生み出す学習については、松尾（2006）を参照

のシーンなどを撮影する時に使うウォータータンクも南半球で最大のものを備えている。また、FOX LIGHTやPANAVISIONといった大手の照明や撮影機材を扱う会社もスタジオ内に入っており、NYFAはこれら全ての会社とも連携を取り、学生の教育をおこなっている。さらにVillage Roadshow はワーナーブラザーズとの関係が非常に強く、スタジオのすぐ隣にはワーナー・ムービーワールドと呼ばれるテーマパークがある。そのテーマパーク内のセットを使用して学生が撮影をすることもできる。オーストラリア校は2013年2月までブリスベンにあるQUTの校舎内にキャンパスを置いていた。NYFAオーストラリア校の校長であるSimon Hunter氏によると、まだ移転して間もないこともあるが、こうした周辺企業と良い関係を築くことが学生の教育に最も重要な点であり、映画教育の重要な要素である、産業と一体化した中での教育を実現することが自分の責務だという。NYFAで学んだ学生には、関連企業でのインターンシップをする機会が与えられるほか、優秀な学生は就職も決まるとのことである。そうすることで、オーストラリア校で学んだ学生は将来の自分のキャリアを見据えて勉強することができ、特に産業との繋がりが密接な映画業界においてこの点は何よりも大きな強みになる。



写真1 NYFAオーストラリア校のWebサイト

そのような大変充実した施設内に、NYFAのオフィスをはじめ、教室がいくつか点在する（写真2）。最大16名をクラスの上限としており、それ以上の大人数の場合は、2クラス以上開講することで少人数制の授業スタイルを徹底している。また、シアタールームも完備し、エディティングルームにある30台弱のマシンから直接様々なフォーマットの映像を読み込むことが可能で、編集した映像をすぐに上映することもできる。プロジェクターもフィルムを始め、3Dプロジェクターも完備している。全体的にロサンゼルスやニューヨークのキャンパスと同等またはそれ以上の環境が用意されている。



写真2 NYFA（左）と学内のシアター（右）

NYFAオーストラリア校は、大学との連携も特徴にしている。QUTとの連携は校舎移転後も続いており、NYFAのScreen and Mediaのディプロマ課程を修了するとQUTの特定学部の1年分の単位を得ることができる。QUTはオーストラリアで最大級の規模を誇る工科大学であり、約4万人の学生が在籍する。特に単位互換の中心に位置するクリエイティブ産業学部には、ドラマや映画をはじめ、音楽やビジュアルアート、演技やエンターテインメント産業に至るハイレベルな教育を提供しており、一映画専門学校が国内トップレベルの大学と一年分もの単位互換を実現している点は十分注目するに値する。このように大学とNYFAが連携をとることで、双方にとってメリットになるのは、やはり産業と一体化した教育方針との関連性が高いと思われる。映画制作の技術のみを身につけるだけの専門学校ではなく、大学のように多少の実践はおこなっても理論や方法論を中心とした教育だけでもなく、それら両方の要素を取り入れて、地元や世界の産業と結びついた教育や環境整備をしてこそ、真に意味がある映画制作を学ぶ環境になるという考え方である。

また、この単位互換制度を利用してNYFAで学んだ学生が、QUTを卒業後NYFAのスタッフとして働きながらそれぞれの専門性を高め、国内やアメリカでの仕事やスキルアップのチャンスを探ることができるような機会提供がされているのも、このプログラ

ムが成功している一つの現れでもある。

さらに自身も俳優やプロデューサーとして仕事をしながらNYFAで教鞭をとる講師に、学生に教えていることの一番大事な点や、映画教育で大切にしている点などについて、レクチャーを交えた話を聞くことができた。オーストラリア校の校長同様、映画教育を産業と一体化した中でおこなう点をかなり重要視しており、学生にもその意味を、ストーリーを伝えることの重要性とともにかなりの時間を割いて教えるという。

この「映画制作で最も重要なのはストーリーを伝えることである」というのは、世界中のNYFAで必ず徹底して学生に伝えられている。一般的にプロット、キャラクター、ダイアログ、会話、アイデア、スペクタクルが映画制作において重要な要素とされるが、特に人はスペクタクルに視点が行きがちだが、それもこれもすべてストーリーが練り込まれていないと意味をなさない、ただの迫力のある絵、綺麗な絵に終わってしまう。また、ストーリーを表現する上で全体のつながりを表現するための「カバレッジ」と呼ばれる撮影が重要になるが、マスター、ワイド、クローズなどそれぞれのショットにはストーリーに裏付けされた表現上の意味を持って撮られるべきで、それがない絵には本来は意味がない、という考え方である。

もちろん、若い学生にとって、プロも使用するスタジオのバックロットで撮影ができること、立派な照明や機材、編集環境は魅力的であるだろうし、それもNYFAが大切にしている点である。しかし、それらはすべて映画のストーリーを伝えるためのものであり、その意味や価値を知らなければ、立派なequipmentsは価値を失う、ということも多く時間を割いて学生に教えているという。さらに、特に日本を含むアジアの歴史などのストーリーには、意味がしっかりと含まれているが、アメリカやヨーロッパ諸国にはそれが少ないとした上で、アリストテレスやプラトンの言葉を引用し、哲学的な視点での物語の作り方や伝え方に関することにも触れて授業をおこなっている現状を知ることができた。

5. 実践型教育に必要な要素の抽出と考察

ここでは、上述の調査をベースにした考察をおこなう。今回の調査では本研究の主題でもある、映画や映像に関する実践型教育の有効性を高めるための数々の重要な要素を以下のように抽出することができた。

- ① 世界や日本における映画教育や映画産業の実情の把握
- ② 自分の環境下で映画制作について学ぶ意味の理解

- ③ 映像制作全般に関する徹底した基礎教育
- ④ スタジオや機材を使った技術や方法論の習得
- ⑤ 周辺企業や関係者との利害の確認や、連携の方向性の確認
- ⑥ 大学と、産・官・民などと協同した実践
- ⑦ 身につけた知識、実力の応用や世界基準での確認
- ⑧ 映画分野と周辺分野とのつながりや広がりの研究

①、②に関しては、日本において映画教育を考える上で、海外の映画教育プログラムや産業の理解無しでは体系的に物事の把握が出来ないため、その意味においても必要な点である。オーストラリアでもそうであったが、アメリカの大学などにおいては、映画について学ぶ学部やカリキュラムが当たり前の様に充実しているが、日本の場合、我々の本務校である金城学院大学の様に、専門学部は無いものの、コンテンツ制作という広い範囲での教育に映画が入り込んでいるケースはある。そのような場合、そもそもの学生のゴールがNYFAの学生の様に映画産業にあることは少なく、むしろ映画制作を通じて学んだことの社会的応用が重要なポイントになる。ゴールは違うものの、NYFAやQUTが独自に、かつ周辺環境との連携を作りながら、ハリウッドではなくオーストラリアで映画教育をおこなっているように、我々も独自のゴールに向かって独自の連携や方法で、映画教育をおこなうことが最も重要であり、そのヒントをロサンゼルスやニューヨークでの調査をベースとして、オーストラリアで得ることができた点は意義深い。

③、④に関する要素は、これまで調査をおこなってきた教育環境は、申し分が無いほど魅力的であることは確かだが、NYFAの教育を支えているのは、徹底した基礎教育にあることも明らかになってきた点である。つまり、映画を撮影する目的や意図、必要な知識や原則論、ルール、テクニックがベースにあり、それと脚本、監督、カメラ、演技、編集などの具体的な役割や専門性を連動させた学習を実践型学習であるHands on形式を含めながらおこなっている。つまり最高の環境で撮影することだけを目的とするのではなく、現場に行くまでにどこまで知識やスキルを高めるかが重要であり、まさに実践型教育の重要性の本質を表している点と言えよう。事実、ハリウッドやニューヨークの現場で培われた経験やスキルを集約したものを教育に反映していることから、現場でも得ることの出来ないハイレベルな教育プログラム生み出すことが出来ている。

次に⑤、⑥であるが、実践型教育の最大の効果である、現場に行って実践経験を積むことができる環境に身を置くことである。そのためには、多くの場合、大学と産・官・民などが必要に応じた連携をとり、互いに足りない部分を補完し合う形で、プロジェク

トと称して進められることが多い。ただし、そこには連携の落とし穴が存在するとも考えられ、次のように仮定できる。多くの場合、連携しておこなっているという形式に重きをおくため、双方の具体的なメリットやデメリットが具体的に詰められないまま、実行に移されることが多い。まずは実行してみて、そこで問題が出れば解決しようという考え方である。その場合、学生は、相手の環境や現場について多くを知らないままに現場に行くことが多く、失敗や分からないことに対して、相手先から指導を受けながら教育的効果に結びつけることも多い。しかし、その時点では大学や学生側よりも企業や行政に負荷がかかることも多く、学生に対して割かなければいけない時間は通常業務にプラスアルファされる部分であるため、機械的な対応や無理な対応になることも多く、結果として継続的に連携が続かなくなるというケースは少なくない。つまり、それを避けるために連携をする前に大学の教育としておこなっておくべきことがあるというのが③、④で挙げた要素の重要性である。本来大学でしか習得できないハイレベルなスキルを身につけることに重きを置くべきであるが、アクションラーニングに代表されるように実践型教育の「形式」に、過度に傾きかけている傾向がある。連携型の現場で、それぞれが単独では成し遂げられなかった大きな成果を得るために、部分的にでも現場で活躍する企業などの人を超える「何か」を学生が持つ必要がある。その点、NYFAは学校の中で現場に近い実践を積むことができ、ハイレベルな知識や技術を実際に現場に出る前に積むことができるため、就職や企業と連携をする時には既にある一定のスキルを持った状態で現場に行くことができる。つまり、NYFAの教育プログラムには大学内でどのような教育をおこなっておけばよいかというヒントを得るためには、非常に参考になる事例が多くある。

このようなプロセスを経て、⑦、⑧のような要素を考え、生み出していくことが出来るようになる。実践型教育としての有効性が真の意味で問われる時代に入ってきた今、大学という教育機関として何をすべきか、今回の調査で得られた成果の価値は大きいと考える。

6. おわりに

2013年度の人文社会科学研究所、同共同研究プロジェクトのロサンゼルスやニューヨークの調査成果報告をおこなった紀要にて、『日本の学生がアメリカにて学ぶ利点として、ハリウッドの環境が作り出す特別な状況は得難いものである。そして、例えばハリウッドで映画を撮影しているという事実が生み出す満足感を背景に、何かを学習するとか知識を得るということよりも、映画を完成させるという「実践」に、結果として

「勉強」がついてくる状況が教育プログラムの中にも出来上がると考えられる。このような状況が作り出す実践の重要性とその経験が机上での学習や勉強では得られない効果を生み、結果としてこのような教育環境が、コンテンツの質を引き上げるという意味での影響も大きい。』と述べた。そして、今年度、NYFAがアメリカ国内ではなく、オーストラリアという海外の地において、大学や周辺企業と連携をしながら「実践」を通じて、独自の教育環境を築いている様子を確認することができ、まさに人の努力や繋がりによって生み出された状況や経験が、新しいスタイルの学習の環境を作り出し、そして、その学習による新たな経験が、次のステップを切り開き、それを見たその道を志す人が後に続くという、良い相乗効果が生まれていくと確信するに至った。

また、映画と言えばハリウッドというブランドは、過去のロサンゼルスでの調査でも十分に確認はできたが、今回の調査で、多くのハリウッド映画の撮影がオーストラリアでもおこなわれるようになってきた実態を知った。その背景には、雇用関係や制作費用の面でハリウッドやニューヨークで撮影するよりもオーストラリアで撮影する方が費用を抑えることができ、法律面での違いがさらにその自由度をあげていることも分かった。加えてワーナーブラザーズのようなハリウッド企業の資本が日本をはじめ、海外に向き始めている点もオーストラリアにとっては追い風の要因であろう。このような実践型教育の有効性には、産業を取り巻く流れや、問題点なども考慮し、体系的に状況を判断できるマネジメント力や実践力も、制作を学ぶ学生に求められている。そのためには、実践型教育という形式だけに偏らない、地に足をつけた徹底した基礎教育と、実践への応用を見通したハイレベルな専門教育が、特に大学の教育プログラムには必要であることを、本調査でも結論として確認することができた。今後は、見えてきた全体像をもとに、実際に教育現場で学んでいる学生や学びを終えて現場で活躍している人にヒアリング調査をおこない、学ぶ者の視点での実践型教育の有効性を高めるための教育プログラムについての研究を深めていきたいと考える。

(参考文献・URL)

- (1) New York Film Academy Australia <http://www.nyfa.edu.au/locations/gold-coast.php>
- (2) Queensland University of Technology (QUT) <http://www.qut.edu.au/>
- (3) 松尾睦『経験からの学習—プロフェッショナルへの成長プロセス』同文館出版、2006
- (4) 後藤昌人・中田平「アメリカの映画産業を対象事例とした大学における映画教育プログラム開発に関する調査研究」『金城学院大学人文・社会科学研究所紀要』第17号、pp.21-29、2013
- (5) 金子満『映像コンテンツの作り方—コンテンツ工学の基礎』ポーンデジタル、2007
- (6) 小山理子「短期大学におけるブライダル教育手法の一考察：PBLを適用した実践型教育の提

案」『京都光華女子大学短期大学部研究紀要』第51号、pp.33-39、2013

- (7) 熊谷浩二・月永洋一・岩淵義昭「建築設計教育における実践型教育の展開」『工学・工業教育研究講演会講演論文集』pp.518-519、2010
- (8) 間島貞幸「オリゼミにおける「one minute video 制作実習」の成果と課題」『メディアと情報資源』第20号第1巻、pp.45-55、2013
- (9) 松野 良一・間島貞幸・五嶋正治・村田雅之・塚本 美恵子『映像制作で人間力を育てる—メディアリテラシーをこえて』田研出版、2013

